

第33回（令和8年）鹿児島県青少年国際協力体験事業帰国報告会発表文
南九州市からの派遣生 指宿高等学校 小田采和さん

私にとって今回のラオス派遣は、あっという間で、一生忘れることのない経験になりました。

私はラオスに行くことが決まった時、初めての海外ということもあり、楽しみだった半面、不安もありました。なぜなら、元々発展途上国に対してあまり良い印象がなかったからです。発展途上国は、学校に行けない子供たちがいたり、栄養の取れたご飯を十分に食べられないイメージがありました。しかし、事前研修で事務局の方の話の中に、「不便を楽しむ」「違いを理解する」「すべてを受け入れる」という3つの言葉があり、私はこの3つの言葉を通し、自分が持っていた発展途上国に対する偏見を捨てて、今回の派遣に臨もうと心に決めました。しかし、実際現地に行ってみると、ホストファミリーだけでなく近所の子供たちが、言語がわからない私を笑顔で迎え入れてくれて、私の不安はみじんもなくなりました。ホームステイ先での生活は、お風呂は水浴びだったり、トイレは流せなかったりと、日本に比べて確かに不便な点はありました。しかし、ラオスの人々はそれでも毎日楽しそうに過ごしていて、日本のような物の豊かさだけが大切なのではなく、人とのつながりを大切にし、笑顔で日々の生活を送ることも大切なのだと気づきました。

また、文化交流では、ラオスの子供たちに書道で名前を漢字の当て字で表し、それぞれにプレゼントしました。日本でしか見ることのない文化だと思うのですが、とても反響があり喜んでくれてとてもうれしかったです。

ラオスでは、托鉢という毎朝お坊さんに食べ物やお金を渡す文化やバーシーという健康や幸福を祈る伝統儀式があり、最初は驚きもありましたが、徐々に慣れてラオスの文化を受け入れられるようになりました。この文化交流を通して、自分の国の文化だけを伝えるだけでなく、相手の文化も知り、受け入れることが大切だと感じました。文化の違いがあってもお互いの国の文化を知っていくことで、言葉が通じなくてもコミュニケーションをとって、仲良くなれるのだと気づきました。ラオスでの体験をとおして、違いを受け入れることの大切さや、言語は違ってもお互いが伝えようとする気持ちが大切なのだと学びました。

ラオスに行く前は、自分のイメージだけでラオスの生活などを想像してしまっていました。しかし、現地の人々とかかわり、様々なことを自分の目で見て体験したことで、自分のイメージだけで判断するのではなく、自分が実際目で見て、いろんなことを体験することが、大切なのだと学びました。私は今回の派遣で、海外の人々に日本の文化を広める活動に興味を持ちました。今後、このような仕事に携われるように、いろいろなことに目を向け、興味を持ったことには挑戦していきたいです。

このラオスで「まだ帰りたくない」と強く思えたことは、この体験事業を通じて自分が確実に成長できたからだと思心から感じています。このような体験をさせてくださった関係者の方々、団員の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。